
† 学園アリス † 佐倉蜜柑の双子の姉は狙われし、危険人物

水影蘭架 ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十学園アリス十佐倉蜜柑の双子の姉は狙われし、危険人物

【Nコード】

N3236BA

【作者名】

水影蘭架♪

【あらすじ】

幼い頃・・・全てのアリスを手に入れた主人公、佐倉梨乃。不安でいっぱいだった少女に、手を差し伸べたのは他界したはずの叔母だった。

家族を守る為、家出をした梨乃。

そして12歳の女の子に迫る謎の組織たちとは・・・？

設定

「名前」 佐倉梨乃

「仮名」 篠崎梨乃

「年齢」 12歳

「誕生日」 5月23日

「身長」 152cm

「体重」 31kg（かなり痩せてる方。

「アリス」 全てのアリスを使う。

だが人と喋るのは余り好きでなく、“飛剣のアリス”を使って会話している。

「容姿」 スカーレット色の髪に、長いストレートの髪を下の方でカールしていて、ポニーテイルにして縛っている。

「主人公について」

板を使って話すのは、謎の組織軍に声で正体をバラさない為でもあった。

唯一正体を佐倉梨乃だと知っているのは、鳴海とベアの二人だけであった。

ペルソナの事を危険人物視している。

いつも十字架のペンダントを肌身離さず付けている。

叔母から貰った大切な物で、ペンダントを付けることで

正常になっている。

いつも空中浮遊のアリスを使用して、ホウキに乗りながら移動している時もあり、瞬間移動のアリスを使ってその場から消える事もある。

だからいつも瞬時に場所を移動していて、位置が掴めていない。

元々は父親からの遺伝であって、梨乃にアリスが受け継がれた。

それを知った叔母が他界する寸前に梨乃に十字架の制御ペンダントを託し、他界した。

第一話

私の名前は佐倉梨乃。

仮名、篠崎梨乃。

どうして私がわざわざ仮名まで作っているかと言うと…。

妹を、叔父ちゃんを…大切な人たちを守る為でもあった。

何で私にこんなアリスが渡ったのか…分からなかった。

多分父親からの遺伝的アリスで…でも私にとってはいらないプレゼントだった。

こんなアリスのせいで…私は危険人物視されている…。

ろくに人生を楽しむ事も出来ない…。

まるで誰かに監視されてるような…。

そんな罪悪感な気分だった。

いつも思っていた…。

暗闇のそこで…。

(どうして私だけが自由になれないの・・・?)

と…。

すごく憎んでいた。

幸せそうに笑う子供を…私は憎んでいた。

でも憎むより先に…私は家族を守る為何もかもを我慢した。

そんな私が…何でこの学園に。

少し高い木に瞬時して、昼寝をしていた。

どうせその内、見張りに気づかれるかもしれない…と思っても、どうでも良かった。

（瞬時で逃げれば良いし…）と、思っていた。

それに担任とか言う人も来てないし…。

小さな欠伸をした時、私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「梨乃ちゃあーん！！聞こえてるー？？梨乃ちゃーん？？」

という声が。

眠たい目を擦りながら下を見るとそこには金髪の髪をした、変な男が立っていた。

（無視したいけどなー…私の名前を言われちゃってるしなー…）

と、思いながらも茶色い板に文字を移した。

【誰ですか？ていうか何で私の名前を知っているんですか？】

するとその人は言った。

「僕は君の担任となった、鳴海だよ。君は篠崎梨乃さんだよね？[△]
[△]」

明らかに作り笑いっぽいんだけどな[△]。

【へえー担任ですかー[△]。】

と、写しながら私はピンク色の大きなヘッドホンに耳に付けた。

大スキな歌を聴きながら寝ようとしていたけど[△]それを邪魔するかの
ように、鳴海という人が言う。

「君は、アリスだよねー？」

【アリス？[△]あー[△]あれね。】

「やっぱり[△]君をわざわざ呼んだのは、この学園に入学してもらう
為なんだよー」

【何で？】

「アリスを持つ物は国から認められているから[△]それで君のアリス
は何かな？？」

【知らない。別にアリスなんてどうでも良いでしょ】

そう写した途端…クスツと鳴海が笑った。

「君の妹さんも同じ事を言ってたよ… “アリスなんかいらへん” っ
てね」

最後にこう付け足した。

「そうだよね…佐倉梨乃…ちゃん^^」

ヘッドホンを取り、木の枝に座り、黒い瞳で鳴海を睨みつけた。

「何で私の本名を知ってる訳？ アンタもZとか言う謎の組織の一員
な訳？」

声を低くして言い放った。

本当の声はソプラノ声に似て、少し高かったけど…今回はそうも行
かなかった。

「それが君の声なんだね。さっきのはアリスなんだね^^」

「笑ってないで私の質問に答えろ。さもないと殺すぞ」

「そんな恐い事を言わないでよ…。君の妹さんから聞いててね…そ
れでこの子かな？ って思っただけだよ。

それに僕はZの組織員じゃないよ？」

「アンタのその態度から誰もがそう思うから。それで今回の目的は

何？」

そう言うと、微笑むのを止め、真剣そうな目で見て来た。

私はまだ睨んでいた。

「さっきも言ったように：君にアリス学園に入学して貰いたくてね…。」

ここに居た方が君に安全性は高いと、思うよ？」

【ふうーん：誰にそんな命令をされた訳？】

「命令って言うか：これは僕の意志でもあるんだよ。

それに：君の妹さんも：今、命を狙われているんだ：だから：梨乃ちゃんの力が必要なんだ。」

私は静かに目を閉じて、千里眼で蜜柑の様子を見た。

するとそこには蛍と喧嘩をしている蜜柑が居た。

【どうやら蜜柑は元気に誰かさんと喧嘩してるけど？】

「え！？…あ：その…」

完全に何を言っていないか分からない様子だった。

そこで私は条件を出して、入学をしようという事を決めた。

【アリス学園に入ってやっても良いよ。】

「え!?! 本当?!」

【正し、条件よ。三つの条件を飲んでくれたら、私も入学する。】

「……良いよ。さあ、言ってみて」

「一つ、誰にも私が佐倉梨乃だと言わない事。」

「二つ、私の言うことを聞くこと」

「ちょっと二つ目が…あれなんだけど…最後の一つは？」

「三つ、私のアリスの事を誰にも言わない事。

この三つよ。良い? 約束を破る、裏切る、忘れるなんて事があったら即、アンタの体の骨を一本折るからね」

そう言うのと、微笑みながら大量の汗を欠いていた。

「わ…分かった。それじゃー、着いて来てくれる? 入学手続きとかもしたいし…」

と言う。

指を鳴らすと、ホウキが現れその上に座ると、下に下りていった。

鳴海と言う人の頭上で私はホウキに乗りながら、風を感じていた。

「……………」

【何の用なの】

「いや・・・ずっとアリスを使っても大丈夫なのかなって・・・」

【あっそ…】

質問になんて答えたくなかった。

いくらあんな条件を出したからってコイツが言いそうな気がしてたから…。

また、あの時みたいに裏切られると思うと…

絶対に信用しちゃ行けないって、心のどこかでもう一人の私が言う…。

心を開いてようやく信用出来る…そう思った瞬間、裏切られる。

それは二度もあった事だった。

「梨乃ちゃん、どうしたの・・・？」

【何でも無い。】

・
・
・
・

・
「だから何なの!!!」

数分後、私は板に映さず、言葉にして言った。

さっきからジツと見やがって…クソ気持ち悪い!!

「え?! い、いや…その…ははは;」

とあたふたしながら、どこかを指さした。

「ここの中に入っててくれるかな・・・? 制服とか、書類とかを取りに行かないといけないし・・・
あ、“黒猫”には気を付けてね^^」

と、言いながら急いで閉める。

「チツ・・・」

と軽く舌打ちをすると、ふかふかのソファに座りながら腕を枕変わりにして寝ようと試みた。

「スー……………スー……………」

気持ち良く寝ようとしていた時、

「「バリーンッ!!」」

という、窓が割る音がした。

私は心の中で「（無視無視…）」と、思いながら安易に寝ていた。

すると窓を割った張本人が私に気付いたらしく、近付いてきた。

？「何だコイツは・・・」

梨乃「スー……………スー……………」

そいつが私に触れようとした時…

「うわぁあっ!!!!!!!!!!」

という声が耳元でした。

梨乃「五月蠅いなぁ…誰よ、睡眠中の眠りを妨げる奴はー…」

そう言いながら天井を見る。

そこには青色のズボンを履いた男が居た。

第二話

男のくせに泣く奴、いるか？

そんな事を思いながらホウキに乗り、天井に釣る下げている男の顔を間近で直視していた。

「……………うう……………グスッ」

「……………」

「……………す……………すみま「チッ」ヒイツ！！！」

こいつ……………これでも男なのか…？

さっきから泣いてばっかで……………

腕を組みながら殴りたい気持ちを抑える。

「あのー……………グスッ……………」

【何？】

「その…これ…解いてもら……………え…ませんか…？」

【悪いけどあんたが私の眠りを妨げるから、解くのは教師が来てからにする。】

そう写しながら下に下りる。

カーペットの上に立ち、ホウキを消すとその男が泣き出した。

「あ、あの…っ！…！！…お願いします…！！…僕は…退学をしたくない…んです…！！！」

私は無視しながらさっきのソファで横になった。

（どうぞ勝手に喚いていて下さい。）と言うかのようにヘッドホンを付けた。

「お、…お願いします…！！何でも言う事を聞きます…！！…ですから…退学とかにだけはさせないでください…！！…グスッ」

音楽を聞いていてもコイツのせいで休むどころか…

指を鳴らし、ホウキを出し、そいつの頭近くに上がった。

【何で一々“退学”にこだわる訳？】

「…俺の家は…貧乏なんです…お母さんに無理をさせないように、
と思って…アリスを持っていた僕は…この学園に入って、貰ったお
小遣いを毎月、実家に送って行ってます…。

そのおかげで…母さんも今は、元気に過ごしているようで…僕にと
っては嬉しいんです。

だけど…退学をすると、もう助けられなくなるんです…お願いしま
す…！！母さんたちの為にも…！！！」

そう言いながら吊るされているのにも関わらず、鼻水を垂らしてい
る。

「はあっ…」と、一息付くと目を閉じ、腕を組みながら言った。

【今回は許してあげる。だけど必ず、この仮は返して貰うからね。】

「は・・・はい!!」

嬉しそうに言う中等部らしき人。

私が一番天辺まで上がると、人差し指の先に炎を灯し、ロープに近づける。

すると…

「ボオオッ!!!」

と、燃え上がった。

「え? え? えええっえ!???!」

と、その人が言いながら今にでも頭から落ちそうだった。

ロープが完全にまっぷたつになると、私は更にその男に向かって白い光を投げつけると、消えていった。

(奇跡的に中等部とか言う所に到着してれば良いんだけどね…)

と、思いながら今度はこのドデカイ窓の修復に当たった。

私が丸い形に手を合わせると、手の申から灰色の小さな渦が現れた。

それを人差し指に灯し、窓に向かって投げると、割れた破片が元の場所に戻っていき、見る見る内に綺麗に直っていった。

ソファの上で横になっていると、さっきの灰色の渦が私の肩近くに止まった。

パチンツと指を鳴らすと、泡となって消えていった。

その直後に大慌てで鳴海が黒い服と、白い紙を両方の手に持っていた。

【遅いんだけど。何分間、待たせば気が済む訳？】

「アッハハ；ごめんねー…？何か中等部の方で、寮の天辺で寝ている男子生徒が居たからー…」

寮・・・？

ああ・・・あの人か。↑

その頃・・・

「ぎゃあああああ!!!!!!!!!!!!誰か助けて!!!!!!」

鳴海「えっとー・・・それじゃー、この制服に着替えてくれる?」

【分かりました。着替えれば良いんですね?】

と、軽く嫌味っぽく言い写し、近くの着替え室で着替え始めた。

無駄に：サイズも一緒なだけど：。

(チツ・・・あの変態エロ教師) ↑

とかも思いながら、私服から制服のポケットの中に音楽器などを移し変え始めた。

全て準備を終えると今度は鏡の前に立ち、自分の顔を見た。

(：サイドだと：バレるかもしれないしね：)

と、思いながら髪紐を解き、ゴムを口に加えながら高い位置で髪を縛った。

そして最後に桜の簪を刺し、カーテンを開けた。

鳴海「準備、出来た……結構似合ってるよ^^」

【はいはい、お世辞は良いから早く済ませて下さい。】

そう映しながら履いていたブーツに、足を通し、チャックを閉めた。

鳴海「あれ……？この学園の靴を履かないの？」

【あれだと足が痛くなるから。それにこのブーツ、慣れてるから】

鳴海「そう…。あ、それとこの書類も書き終えたけど…アリスの所、どうしょっか」

机の上にある紙を見ながら言った。

「飛剣のアリスで良いんじゃない。」

鳴海「飛剣……？」

「飛剣。早く書いて」

そう言う鳴海が「あ…そうだね」と言い、ペンを動かした。

数十分後。

ようやく書き終え、今度は初等部Bクラスに向かっていた。

勿論私は歩く気にはなれなく、ホウキに座って飛んでいた。

それを驚きながら見る鳴海。

鳴海「あ、ここだよ^^」

（ドアからしてでかつ!!）と、心の中で思った。

「そうだ…。私はこれから喋らないから…適当に言っておいて。」

鳴海「え?……………あ、うん(汗)」

【それじゃ、よろしく】

そう映すと、地面に下りてはホウキを消した。

流石にいつまでも乗っていると…ギックリ腰になっちゃうというか…。

鳴海がドアを開けると一瞬にして、五月蠅くなった。

いや…五月蠅いのは廊下にいて、分かってたけど…ここまでエコーしているとは…、

流石、エスカレーター式、国から認められた小、中、高が合体しているだけでもあるねーwww

鳴海「はぁーい皆ー!静かにー!」

「「「「「「ガヤガヤガヤg（（ry「「「「「」

こいつ……これでも教師なのか……???

と、言いたくなるけど……余り言葉を発する訳には行かない。

嫌でも我慢…我慢…。

鳴海 「はあーい皆ー、静かにー」

一向に静かにならない……。

（うぜえーんだよ黙れ黙れ黙れ黙れっ！）と、どす黒い殺気を出していた。

鳴海 「え? ; 梨乃ちゃん? ; ;」

私は黒板前に立ち、爪を出し黒板に当てた。

そして…。

「ギ
「イ
「イ
「イ
「イ
「イ
「イ
「イ
「ツ
」
」
」

「「いやあつあつあ……！……！……！……！／やめろおおおっお！」

パンパンツと手を払うと、鳴海を睨んだ。

鳴海「ようやく静かになったねー…えっとー、こちらが転入生の篠崎梨乃ちゃんです^^」

(おい：テメーら何睨んでんだよ：殺んのか！？)と、心の中で思っていた。

すると鳴海が黒板に大きく、『篠崎梨乃』と書き上げた。

鳴海「えっとー、梨乃ちゃんは今日来たばかりなのでー、色々と教えてあげて下さいねー。

あ、それと：梨乃ちゃんは、ある事情で声を出す事が出来ませんが：そこは：手を差し伸べるなど、してください。
はい、梨乃ちゃんに対してー：質問はあるかな？」

すると一番後ろの席に居た人が手を上げた。

「はぁーい！先生、篠崎さんは何のアリスなんですかー？」

鳴海「あー：えっとー：」

梨乃「小声」 適当にスルーしておいて。」

鳴海「小声」 え！？ちょっ；梨乃ちゃん；」

「先生ー？で、何ですかー？」

鳴海.. 「あー：えっとー；」

鳴海.. 「それは・・・、また後で分かるかな。」

(おお Wナイス W)

「「はあ?？」」

とか不満の声を上げる人達。

第三話

だけどその中で、一人だけ違う反応をする人が居た。

…一人じゃないか。

……約、2名だけ違う反応をする人たちがいた。

蜜柑「り……の……？」

蛍「……………」

それは紛れも無く…蜜柑と蛍だった。

本当にここに居たとは…。

鳴海「……………えっと、梨乃ちゃんの席はー…一番後ろだね。
一つ空いてるでしょ？ 棗君の隣だから^^」

誰にも聞こえないぐらいに軽く舌打ちをする。

そして歩き出す。

（ジロジロ見てんじゃねーよ！！）（裏、梨乃）

一番後ろの席に辿り着く。

？「よろしく、篠崎さん。」

（あー、はいはい。よろしく。）と、心の中で思った。

発する気、0だし。

私が座ると、隣から・・・の人のペットが、私の膝の上に乗った。

？「あ！・・・」

ずっと見ているとウサギが何かを言いかけていた。

『どうしたの？』

『君はダレ？』

『私は・・・梨乃。りのって読んで』

『りのっち・・・』

『え、いや、“りの”だよ？』

『りのっち！』

この時私は思った。

何て我儘なんだ・・・と。

私が撫でて、持ち主に帰すと何故か…微笑みが返って来た。

？・・・「……………」

あー…視線がかなりうざい。

?…「あ…俺、乃木琉架。よろS（「五月蠅いなあー…」は…?」
つい、喋ってしまった（汗

前の席「五月蠅いんだよ…静かにしてくれないかな?」

アリスを使って、前の席に居た男子の体を借りた。

するとその人が大量の汗を流しながら、腕を前に降っていた。

「お前…流架さんに…」

「いや!違うんだ!それは…」

（どうだどうだ（笑）思い知ったか! W私のアリスをW W W）

そう心の中で思っていた時、誰かがやって来た。

「篠崎さん。僕は学級委員の飛田祐です。そしてー…」

「今井蛍です。」

「僕たちは鳴海先生から色々と教えるように言われているんだ。」

（は!?!?）と思って教卓の方を見ると、そこにはさっきの奴の姿は
無かった。

梨乃「よろS（「おい…新入生…」チッ」

棗「お前、どんなアリスを持ってるんだ」

喋ろうとした時、声がした。

『誰がテメエー何かに喋るか。この糞猫』

ああ…読心術か。

『私がどんなアリスを持っていようと・・・』

棗「どんなアリスを持っていようと？」

そこで読心術を使う奴は黙った。

私が心の中で『それ以上言ったら、テメエー殺すぞ』と言ったから…。

？「どうした？」

「いっ…ごめんなさいっ！」

と、笑顔で謝られた。

周りの人達は何がどうなっているか、さっぱり分からない様子だった。

だけどそんな時、KYが現れた。

それは…

蜜柑「篠崎さん。ウチは蜜柑って言うねん。よろしくな」

蜜柑・・・

何で私の前に現れるの・・・？

ねえ・・・何で？

今までに我慢していた気持ちが、、怒りがこみ上げてきた。

我慢・・・我慢・・・。

蜜柑「篠崎さん・・・？どないした？？」

黙ってよ・・・今すぐに私の目の前から・・・消えて！！

蛍「・・・？」

お願いだから・・・消えて！！！！

？..「お前・・・さっきから見れば！！無視してんじゃねーぞ！！」

軽く舌打ちをしながら、そいつを睨んだ。

梨乃「は？」

ここに来てから発した言葉。

良いよ・・・後で記憶を消すから。

正田「貴方ねえー！！新入りだからって調子に乗らないでよ！！ルカ君がよろしくって言ってるのに・・・無視するなんて、最悪よ！！」

？「そうよそうよ！！ファンクラブでもある私たちが許さないわよ」

委員長「ま、待って皆！！喧嘩は「だから何？」梨乃・・・ちゃん？」

梨乃「だから何？」

私はもう一度、静かな声で言った。

「「は！？」」

梨乃「アンタ達、嫉妬してんの？」

この人に話しかけて貰えないからって嫉妬して人に当たる訳？

それは偉いご苦勞だねー。ファンクラブだか何だか知らないけどさー、本人たちの許可無しでそんな甘ったるいクラブを作るの、辞めたら？

ある意味ストーカーなんだけど（笑）」

その言葉に二人が顔を赤くした。

「「な・・・何よ！！アリスなんか持っていないくせに！！」」

そう言った時だった。

私の怒りが頂点に達した。

片方の手を上に上げると、その人達の周りには刃物や、剣の刃たちが彼女たちに向かっていた。

梨乃「さあ…これでまだ何か言い残す事は無い？」

正田「な！？何をする…つもりなの！！」

梨乃「あんたたちを“殺す”つもり。」

「おい！！やめろ！！」

梨乃「部外者は黙ってろ！（ギロツ）」

数人の女子が教室から出て行こうとした時、金縛りのアリスを使って、全ての至る所に鍵を掛け、固くした。

「っし、正気なの！？」

梨乃「ええ。正気よ。私は数々の人間を殺して来た。だからアンタ達を殺すなんて…容易い事よ。」

そう言った時だった。

「いい加減にしろ！！」

私のすぐ後ろに居たのは日向棗だった。

私が左手で催眠術をかけると、日向棗以外の人達が全員倒れた。

日向「!?!?・・・何をした!?!」

梨乃「“催眠術”に“記憶消失”」

日向「記憶を消す必要があんのか・・・?」

梨乃「ええ。あるわよ。

まあ…アンタにも寝て貰わないと、私の正体がバレちゃうから…」

日向「待て!?!」

梨乃「悪いけど私命令されるのが嫌いなのだ。」

ホウキに股がり、煙を日向棗の方に撒き散らした。

そして…煙を全て、取り除くと…やがて数分後に皆が置き出した。

私も一緒に寝ていた…という事にして、乃木流架の隣で寝ていた…という事にした。

委員長「あれ・・・僕たち、何をしていたんだっけ・・・?」

そしてさっきのようなやり取りが行われた。

最終的には…日向棗が最悪な条件を出して来た。

『お前が一週間以内に馴染めなかったら即効退学だ。だが…チャンス（（ry』

とか長ったらしい話も聞き終え、私は北の森の入口前に来ていた。

そして何故か・・・委員長、蜜柑もやって来ている。

今すぐにでも消えてほしい・・・。

だけどいつまでもずっと、こう思っている訳にも行かない…。

そう思うと、我慢をした。

拝啓、お祖父ちゃん。

何ヶ月ぶりかな・・・、私は今でも元気にやっています。

お祖父ちゃんは幼い頃、私に“嘘はあかで”と言ってましたよね・・・。

私、今日・・・嘘を付いてしまいました。

それと・・・お祖父ちゃんと蜜柑には、すっごく迷惑を掛けたのは・・・分かってます。

でも・・・二人を守る為でもあったんです・・・。

また、会えたら・・・良いですね。

b y、梨乃。

第四話

ⅡIN北の森、入口Ⅱ

委員長「梨乃ちゃん!! 気を付けて行動しようね・・・!」

気を付ける必要・・・あるの?;

何か出て来た時は・・・適当に燃やしちやえば良いでしょ(笑)

いや…駄目か。

【分かった。私も気をつけるね。】

と、板に写した。

蜜柑「今の何や?? すごいなー!!」

【飛剣の“アリス”】

蜜柑…「へ・・・?」

「「ア、アリスうううう!!!???!?」」

委員長「どうしてそれを棗君たちの前で言わなかったの!?!」

【私、アイツ嫌いだから。だってさー…急に話したり…ファンクラブとかが話の中に入って来たりって・・・】

蜜柑「でも・・・ウチのアリスよりすごいやん!!」

【あ・・・ありがとう・・・】

蜜柑「なんやねん!! 今の間!!」

そんな事を会話しながら奥深く・・・進んでいくと、突如変な音が聞こえ始めた。

蛭「早速変なの出た」

すると二人が声に出して言った。

「「ベアー!!?!?!?」」

と。

私はゆっくり近づいていった。

蜜柑「しししい篠崎さん!!?!」

委員長「りりりりり梨乃ちゃん!! 危険だよ!!!!」

【大丈夫、全然大丈夫】

背後にメモを残しながら、しゃがんで優しく微笑みかけた。

『貴方は誰? 私は篠崎梨乃。』

『…皆からは“ベア”って呼ばれてる…』

『そう…。ベア…良い名前だね^^』

『お前…優しいな。』

『そう…？ありがと…でも、私は危険な人だから…』

『危険…？何故だ…？』

『“蜜柑”って奴、居るでしょ？』↑

『私ね、その人の姉なの。これは秘密だよ？

それでね…今は余り声を出さないようにしてるの。

私…全てのアリスを使用出来るから、謎の組織に狙われてるの。
だけど今日…この学園に入ったばかりなんだ…』

そう言うときベアが私の頭を撫でながら、心の中で言った。

『お前…気に入った。梨乃…だな？

いつでも遊びに来い。待ってるぞ。それに歓迎するぞ』

そう言うとき、私は微笑みながら「ありがとう。」と言った。

久しぶりに…本当の事を言えて、心がスッキリした。

そこで私は思った…。

いつまでも板を使っていると流石に…だから声を変えて、やれば良いんだ…！と…。

委員長「ねえ…梨乃ちゃん。」

梨乃「ん？何？」

「「……………」」

調度高さの練習をしていて、元の声の高さより…少しだけ声が更に低かったけど…

声でバレて、正体もまる分かり…って言う事は避けられたから…大丈夫かなと思った。

蜜柑「喋れるんかい…；しかもアルト声に近いし…」

梨乃「ああ…ただ、めんどくさかったただけなんだ♪」

笑顔で言う私。

蛭「でも貴方…私知ってる梨乃と少し…似てるわね…。」

梨乃「へ？」

蜜柑「梨乃…元気やろか…」

（ああ…成程。）と、心の中で思い、歩き出した。

委員長「はあ…でも前にもこんな事、やったよね」

蛭「そうね…蜜柑の時も…こんな感じだったわね。」

一つ違っていたのは…ベアに倒されなかった事だけだね。」

梨乃「え！？ベアが?!」

ⅡIN食事中Ⅱ

出来上がった食料は、動物たちに上げていた。

梨乃「はい^^どうぞ」

おかげで周りには動物がいっぱい…。

蜜柑「全然雰囲気が違うやなー…」

梨乃「うん。私は嫌いな奴の前だと、裏性格になるからー（笑）
だけど今は…表だよ。

「「へ…へえー…（汗）」」

すると三人が何か…可笑しい状態だった。

梨乃「あの…どうしたの？」

委員長「うううううううううう後ろ!!!!!!」

梨乃「後ろ…?」

を、振り返るとどこかいひよこが…。

私は指を鳴らすと、ホウキにまたがり、ひよこの目線まで上がった。

近くで見ると…すごい迫力が（汗

梨乃「…こんにちわ^^」

「「ピヨッ?」?」

梨乃「私は梨乃。貴方は?」

「「ピヨッ・・・?ピオー!」」

梨乃「へえー…ジャイアントピヨって言うのね・・・可愛いね^^」

「「（す…すごい;）」」

「「ピヨッ!!ピョー!」」

梨乃「会いたい人が・・・いる?」

「「ピヨッ!!ピョピヨッ!!」」

梨乃「えっと…ちょっと待ってて!!」

それだけ言い残すと、瞬時のアリスで三人の元に急いだ。

蜜柑「どうだったんや・・・?」

梨乃「“会いたい人が居る” って…」

蛍「どうする？」

委員長「こうなったらまた…やるしか…」

三人は一緒に

「「誘き寄せるしか…!!」」

と、同時に言った。

それから数分後…本当に乃木流架はやって来た。

蜜柑「お願いや!! もう一度だけ…力を貸してくれへんか?!」

流架「触るなブサイク！」

蜜柑「もう一辺言っ m ((「お願い!! どうしても…貴方の
力が必要な…!!」 梨乃!？」

私がパンッ!! と、手を合わせながら言うと言顔を赤くしながら言っ
た。

流架「わ…分かったよ!! だけど…見んなよ!!」

梨乃「何で? 見ちゃ行けないの? 乃木君」

流架「だ／＼から…／＼／＼ともかく見んじゃねーぞ!!」

う…うわ（（）

と、思いながらも私は何度かもシャッターを押していった。

異空間というのは…この事だな（爆笑

そして最後の最後まで私はシャッターを押し続けた。

それは勿論、蜚もだった。

流架「おい…見んなったよな・・・？」

梨乃「あ…ごめん（笑」

流架「テメェー！！ごめんで済まされr「あ、でも…カッコ良かったよ？…あ、可愛いかな…まあどっちでも良いんだけど…ね（笑」
な！？／／／男に可愛いとか…言ってるじゃねーよ…お…／／／

やばい…最後の所、吹きそうになった。

でも表の私って事は…乃木君なら大丈夫。そういう事か…。

蜜柑「ルカピヨン☆シ」

梨乃「ブツ・・ごめ…笑っちゃった」

流架「おい…篠崎!!…今の絶対にわざとだろ!!」

梨乃「違う違う!!…ブツ…ごめん…ブツ…」

と、私はさっきから笑い連発していた。

我慢しようと思っても…出来なかった。

歩いていた時…だった。

流架「な…棗っ!」

棗?

と思いながら振り返った時、物凄い殺気を出しながら睨む日向棗が居た。

棗「流架…帰るぞ。ゲームは終わりだ。この女は失格だ」

我慢…我慢…。

委員長「そ…そんな!!」

蜜柑「ちよっ!! 待てや!! 梨乃は・・・」部外者は黙ってろ。」何やて!?!」

棗「さっさとこの学園から出て行けよ・・・」

梨乃「・・・悪いけど、そうも行かないから」

棗「!?!?・・・どうやらナルの話：嘘みたいだな。“交通事故で声を無くした”と・・・」

梨乃「何の話? “交通事故” 何て、一度も無かったけど? ただ単に私は“喋るのがめんどくさい” だけだけど?」

棗「・・・」

そして今度は殺気を出しながら両手に、炎を灯した。

棗「てめえーのアリス・・・さっさと吐け」

梨乃「何で一々アンタ何かに言わないと行けない訳?」

棗「黙ってさっさと吐け…。もうテメエーの為に一々手段は選ばねえーよ・・・」

梨乃「そう…。何の手段を選ばないんだっけ?」

そう言うത്私が瞬時で、そいつの両手の炎をかき消した。

氷で消すと、お見舞いに一発、腹に蹴りをかました。

梨乃「危ない物を解き放ってんじゃないよ。糞炎が」

「「「え……」」」

そう言い、近づいた。

棗「テメー……何…者だ…」

梨乃「普通の女の子だけど？
てかそれ以外に何があるって言うの？」

棗「なめやがって!!」

そう言いながらフラつく体で、左手に炎を灯した時…すぐさま氷の刃が炎の突き刺さった。

梨乃「女を舐めない方が…良いよ★」

すると甘い香りが漂って来た。

鳴海「へえー…喋らないって言ってたけど…」

梨乃「声を落とせばバレないかなってね★」

鳴海「（それでも同じなんじゃないのかな・・・（汗））へ…へえ
ー…、」

梨乃「それで…この試験とやらは合格なんですよ？」

鳴海「うん。初等部B組の仲間入り、おめで「ふざけんな!!」こんな・・・」え？」

梨乃「何？今度は負け惜しみ？」

棗「違えーよ!! テメーの…アリスを吐け!!」

梨乃「はぁ・・・アンタに取って良い答え方をしてあげるよ。“いや”」

棗「テメー!!!」

日向が炎を出そうとした時、鳴海が即止めた。

鳴海「ほらー。喧嘩はおしまいだよ。梨乃ちゃんだって、もう入学決定なんだから^^」

そう言うのと今度こそ、日向は眠りに堕ちた。

一人、勝利の笑みを浮かべていた。

拝啓、お祖父ちゃん。

私は何とか試験に合格出来ました。

ちよつと学園1の性悪男と喧嘩もしちゃいましたが・・・上手くや
って行けそうです。

お祖父ちゃん、元気ですか？

また・・・会えたら良いね。

いつまでもお祖父ちゃんの事を遠くから見てるからね☆ミ

b y, 梨乃

第五話（前書き）

無事に正式入学をした梨乃。

そして蜜柑と、再開したもの・・・憎悪の気持ちで埋もれていたが・・・

何とかその気持ちを堪え、話をする事に…。

第五話

私が来てから二日目となった。

つまりは・・・授業初日。

そう、授業。

そして私は・・・わざわざ早起きして、担任の後をついて行った。

梨乃「朝早くから・・・何の用なの？」

鳴海「まあまあ。君に“星”を渡さないと行けないんだよね」

梨乃「星？」

鳴海「そう。皆、制服についてるでしょ？小さな星形の・・・」

梨乃「ああ・・・」

鳴海「それを梨乃ちゃんにも付けて貰わないと行けないんだよねー
^」

梨乃「へー・・・ほー・・・そうー・・・」

どこかの部屋に案内され、白い机の上には一つの皆より違う星と、
お金らしき物が置かれていた。」

鳴海「はい、これだよ。」

梨乃「・・・？」

鳴海「これを“スペシャル（幹部生）”と言って、プリンシパルの一員の証なんだよ^^
文字の通り、梨乃ちゃんはプリンシバルという…学校では生徒会って言うのかな？…まあその一員なんだよ^^」

私は手に取りながらずっと見ていた。

梨乃「つまり・・・前に出て指揮を取るって言うアレ？」

鳴海「うん。まあそうなるかな」

梨乃「……………パス」

鳴海「ええー；そう言わないでよ；」

梨乃「前に出るとか絶対に却下。」

鳴海「まあまあ；それに初等部での幹部生は、梨乃ちゃんと棗君の二人だけなんだよ？」

梨乃「……………もつと嫌だー」

鳴海「まあ…付けて貰うしかn（「で、これは何？」 あー…それは、お金なんだよー」

梨乃「・・・ラビット？」

鳴海「このアイス学園ではお金の事を“円”じゃなくて“ラビット”って読んでるんだよ。

ちなみに梨乃ちゃんと、棗君とお小遣いは30000ラビットなんだよ^^

一ヶ月で30000ラビット。13ヶ月では？」

梨乃「39万ラビットでしょ」

鳴海「正解。それにこのラビットは、セントラルタウンでも使えるんだよ。

一ヶ月の内に皆で買い物に行くから、好きな物を買おうと良いよ。」

梨乃「はいはい。分かりました。それで、サイフとかは自由なんですよ？」

そう言いながら、スカートのポケットの中からピンク色の縦長サイフを取り出した。

鳴海「うん。自由だよ^^

まあ…説明も終わった事だし、ほら、星を制服の所に付けなきゃ^^」

梨乃「…………死ね。」

星を取ると、白い布の下に付けた。

別にどうだって良いんだけど…

っていうか…何かサイレンが鳴ってるーWWW

Ⅱ I N B 組にてⅡ

鳴海…「はいはい。改めて、新入生の篠崎梨乃ちゃんです。

そこで…梨乃ちゃんにこの学校の事について色々と教えるパートナーを決めたいと思います。

誰か立候補したいとかいませんか…?」

蜜柑「はいはいはい!」

梨乃「パス」

蜜柑「何でやー!!!」

鳴海「それじゃーいないようだから…こちらで勝手に決めましたー!!!」

相手は…日向棗君でーす!」

一部「「はあああああ!?!?!?」」

私が言う前に…消えやがってアイツ。

後で骨を一本へし折ってやる。

流架「……………」

私は嫌々ながらも一番後ろの席に着いた。

座るとまた、隣からウサギが振って来た↑

（私…動物にまで好かれたのかな…）と、思いながら撫でていると…

流架「棗…大丈夫か？」

小声で何かを話していた。

棗「ああ…大丈夫だ。」

（ああ！あのサイレン、コイツの仕業って事かw）と思いながら、笑いを堪えていた。

IN一時間目は、神野先生って言う人の授業だった。

数学は好きだけど…流石にこれは、勉強した奴でちよつとつまんなかった。

小さな欠伸をして、寝ようとしていた時・・・何かが浮いていた。

すると…

「「コケコココツケココー」」

一瞬にして、神野先生が怒りだした。

それは蜜柑の時計だったらしく、さっきから五月蠅い。

次にゴミ箱が、蜜柑の頭の上に浮かんでいた。

（あー…これはヤバイかもー…）何て、思いながら机の下で念力の
アリスを作動させた。

するとそのゴミ箱が、すぐ私の隣の人の頭に乗った。

梨乃「ブツ…」

正田「なっ！！！」

「いやあああああ！……！！！」

「」

神野「佐倉蜜柑……お前には良い機械だからこれを機に星階級を
決めてやろう。」

（あれ？まだ決まっていなかったんだ・・・w）

神野「星無しだ。」

（ああ……お気の毒に。……って星……なし？ W）と、軽く考えていた。

IN放課後。

私は寮母の高橋さん（？）に出迎えられていた。

高橋さん「まあこの子ですかー。宜しく願います。梨乃さん。
梨乃さんの部屋をご案内しますので、着いて来て下さいな」

梨乃「あ…はい…」

四人で行く事になったのは良いけど…どこかに辿り着いた。

ドアからしてすごいデカイんだけど・・・；

高橋さん「幹部生の方はこのお部屋になるんですよ。」

教室が約2個分はあるんじゃないか…と思うこの部屋。

何よりも、ベッドが非常に大きいし…シャンデリアが二つのあるし
…皆より2倍は大きいこの机。

それに大きめのタンスに、何かの本棚…。

そして部屋の中には豪華そうなトイレとお風呂が↑

それに最新型の洗濯機もある♪

うわ…。

そして蜜柑の部屋は…。

何とも言えない↑

私は夜のご飯も食べ終え、お風呂にも入るとベッドの上でゴロゴロしていた。

梨乃「大きすぎて反対に…何か↑」

と思っている所だった。

＊IN朝＊

カーテンを開けて、暖かな日差しを浴びる。

梨乃「んゝ！！よく寝れたゝ♪」

朝の朝食・・・誰よりも早く食べ終わると、星なしの手伝いをしていた。

高橋さんには『やらなくともええやで！？』と言われたけど『こういうの好きだから・・・やらせて下さい！』と言った。

梨乃「♪♪」

蜜柑「負けるかッー!!!」

更にお皿を増やそうとした蜜柑。

梨乃「そんなに一辺にやると、割れちゃうよ? W」

と言うと…

蜜柑「平気やで!!」

と言って…私も楽しみの余りやっていたら、お皿が沢山割る音がした。

高橋「はよ、片付けるっす」

梨乃「待って下さい! 私に任せて下さい!」

キュキュツと手を拭くと、灰色の渦を出した。

するとその渦がお皿の周りで踊るかのようにあちこちに動き始めると、バラバラになった更の破片が一つになって、食器棚の中に綺麗に片付いていった。

「「おおおお!!!」」

蜜柑「これも梨乃のアリス??」

梨乃「うん。刀の力で出来るんだ^^」

坊主「お前：新入生の：お前もまさか、星なしなのか？？」w」

梨乃「無視」さ、早く片付けちゃおう」

そう言うときチャイムが鳴った。

高橋「梨乃さんはもう行くツスよ！！」

梨乃「分かりました：また来ます！」

笑顔で言うとき、瞬時のアリスでB組の前に辿り着いた。

中に入るとまだ、先生は来てなくてギリギリセーフだった。

続いて三時間目は合同授業とか言うのだった。

合同って：何すんの？；

てかあのエロ教師、どこに消えやがった。

『後で僕の所においでよ。何系のクラスか教えてあげるからさ』

とか言っておいて……

「迷ったー……」

という言葉が次に出て来た。

「ああー……最悪ー……てか鳴海、どこ行ったー（棒読み）」

そんな事を上の空で呟いていた時、最悪な奴と出会った。

するとそいつに腕を引っ張られ、草の中に隠れた。

（アイツ確か…ペルソナだっけ?…）と思っていた時。

「棗・・・居るなら返事をしろ・・・棗」

辺りを見回し、誰もいないと確認するとどこかに向かって歩きだした。

日向「……はぁー……」

梨乃「アンタも変な奴に追われてるねー…」

日向「うるせえーよ…」

梨乃「まあどうでも良いんだけどね。」

とだけ言うと、そいつの前から立ち去った。

ともかくパートナーだか何だか知らないけど、どうしても一緒に居たくなくて、B組に戻った。

誰も居ない教室で…私は昼寝をするんだ！

梨乃「おやすみ～……」

そうして寝ようとしていた時・・・邪魔者という邪魔者がやって来

た

第五話 (後書き)

寮母の 高橋。

第六話

「君は・・・」

と言いながら私の近くにやってくる黒服の人。

【……まずは貴方から名乗ったらどうですか？】

そう映すと、その人がフツと笑いながら言った。

「私の名前は…ペルソナ。これで良いか？」

【…私は梨乃です。それで私に何のご用ですか？】

「いや…ただ授業に行かないのか、と黙っていてね…」

【担任の鳴海先生にクラスを聞き忘れて、待っていたんです。】

「そうか…。わたしが探して来ようか？」

【結構です^^】

そう言うのと調度チャイムが鳴った。

一瞬、（救われたっ！！！）と思った私だった。

けどまだ…話は続いた。

「話がある。昼休み、私の所に来なさい。篠崎梨乃…いや…佐倉梨

乃さん？」

梨乃「！？……………」

それだけ言うとアイツは出て行った。

私はずっと考えていた。

どうして私の名前を知っているのか…それが不思議でたまらなかった。

蜜柑「…の…り…梨乃！！」

梨乃「な…何？」

蜜柑「さっきからずっと呼んでるけど全く返事が無いから」

梨乃「ご…ごめん」

委員長「梨乃ちゃんどうかしたの？具合でも悪いの？」

梨乃「う…ううん。大丈夫だよ」

蜜柑「梨乃も昼休み、翼先輩の所に行かへんか??」

梨乃「え…?昼…休み？」

蜜柑「せやで。皆に紹介しようと思って」

梨乃「私は……遠慮しておくね」

棗「……………」

蜜柑「そうかい…また誘うわ」

梨乃「うん…ありが…」

そしてあつという間に昼休みになった。

森の中をさ迷っていると…後ろから声をかけられた。

「よく来てくれたな。」

【来いと言ったのは貴方ですよ？】

「そうだったな…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3236ba/>

†学園アリス†佐倉蜜柑の双子の姉は狙われし、危険人物

2012年1月9日19時51分発行